2.未来に伝える歴史と文化

篠路子ども歌舞伎伝承式（平成30年1月26日、篠路コミュニティセンター）

「篠路村烈々布素人芝居」から「篠路子ども歌舞伎」へ

篠路歌舞伎保存会　会長　大髙（おおたか）　英男（ひでお）

篠路村烈々布素人芝居の創始者の大沼三四郎（一番左）

明治時代、本州や九州から、篠路村に入植した開拓移民を悩ませていたのは、頻繁におこる石狩川の氾濫でした。大洪水は開拓移民の生活に深刻な影響を与えていました。農作物への被害は甚大で、これによって多くの篠路村村民が農地を放棄して、離村するということがありました。特に、明治 29 年と明治 31 年の大洪水は大きな被害を残しました。

この災害を乗り越えるために、村の青年たちは神社（天満宮）を創建しました。そして、青年たちは健全娯楽としての素人芝居を神社に奉納しようと、歌舞伎の稽古に取り組みました。これが「篠路村烈々布素人芝居」で、明治 35 年 4 月に初公演しました。

後に、「篠路歌舞伎」と呼ぶようになったのは、昭和 47 年頃に調査に来ていた文化関係者が「烈々布という集落はもうないのだから」とし、それ以来「篠路歌舞伎」と呼ばれるようになりました。

篠路歌舞伎は、篠路村を中心に 33 年間、演じられていましたが、昭和 9 年 11 月の公演を最後に、それ以来 50 年間演じられることはありませんでした。

この篠路歌舞伎が復活したきっかけとなったのが、昭和 60 年の篠路コミュニティセンターの建設でした。この開館祝賀会において、地元有志によって演じられた“ほてから座公演・白浪五人男（しらなみごにんおとこ）”は、祝賀会参加者の拍手喝采を浴びて、半世紀もの間、演じられることのなかった篠路歌舞伎の復

演目「白浪五人男」

活を喜んだのでした。

復活した篠路歌舞伎を、これからも保存伝承していこうと、昭和 61 年 12 月に「篠路歌舞伎保存会」が創立されました。

当初、地域の有志の者は、大人による歌舞伎の復活を考えていましたが、これには諸々の問題があり実現は難しいということになりました。しかし、篠路歌舞伎の復活と伝承を何としてでも実現することに情熱を抱いていた初代会長の柳沢正幸氏は、これを篠路中央保育園の園児に教えて、「子ども歌舞伎」を実現させました。これが大好評で、以来、篠路コミュニティセンターを会場に開催される篠路文化祭などで公演を行い、毎年大好評を得ています。演目も年によって変え、現在「白浪五人男」、「忠臣蔵」、「勧進帳」の三演目を有しています。

明治、大正、昭和の三年代に演じられていた「篠路歌舞伎」を伝承した「篠路子ども歌舞伎」は郷土の伝統芸能として、永く公演できるようこれからも市民の理解と支援を得てまいりたい。そして、観る方に感動と感激を与えたいと思っています。

昭和 9 年 11 月の公演風景

演目「忠臣蔵」

演目「勧進帳」

保存会は、現在、80名の個人会員と7団体の会員で運営しています。会員の加入は随時受け付けていますので、下記までご連絡ください。

○お問い合わせ

- 会長（大髙）TEL. 011-771-1166
- 総務（大沼）TEL. 090-7301-3830
- 年会費：千円です。

成人式を終えた歌舞伎伝承会

新琴似歌舞伎伝承会　事務局長　宮﨑（みやざき）　義晴（よしはる）

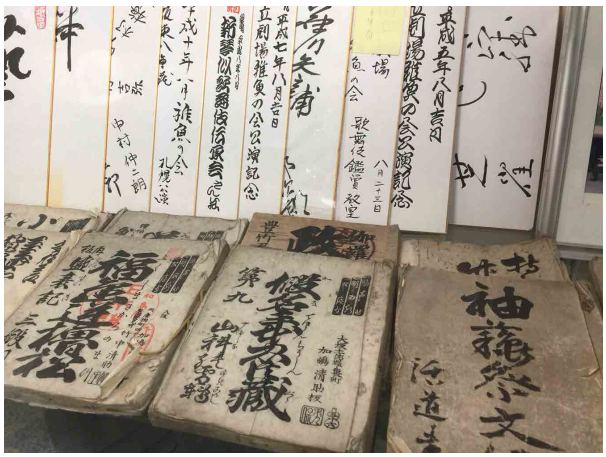
130 年前は原生林に覆われ動物たちの住みかでありました新琴似。明治 20 年 5 月、第一陣が北方の防衛と開墾を兼ね備え、九州地区を中心に屯田兵が編成され入植したこの地域。今では、札幌市郊外のベッドタウンとして目覚ましい発展を遂げております。

入植当時は、朝日が昇ると同時に馬と一体になり陽が沈むまで開墾いちずな生活であったことと思われます。時には、男性たちは北方の防衛訓練に召集され、後を女性と子どもたちで留守を預かり開墾に精を出されたと聞かされております。ゆえ、娯楽といわれるような楽しみは乏しかったと思われます。

新琴似歌舞伎が産声をあげたのは明治 30 年ころ。鳥取県から開拓民として父長次郎と共に入植された田中松次郎を中心とした地域の若者達が、地元の祭典時などに神社境内で歌舞伎芝居を演じ始めたことが新琴似農村歌舞伎の発祥です。娯楽の乏しかった当時では画期的な芝居として、人々の人気を博することになりました。

田中松次郎

当時は「農村文化のはしり」と持てはやされ、一座の団員も多く、松次郎さんは座長として芸名を「松楽」と名乗り、自費で常設の歌舞伎小屋（若松館＝明治 43 年 12 月完成）を建設するほどの意気込みで繰り広げられました。観覧料は無料で、いわゆる「花」「投げ銭」といった寄付で経費を賄い、収支は結構成り立っていたようです。



当時の歌舞伎の台本

しかし、年号も明治から大正へ変わると、映画が新しく登場したことにより、観客の多くが歌舞伎から離れ映画へと興味が移行し、大正初期、惜しまれつつも終えんを迎えました。

以来長い眠りについていた、かつて地域で栄えた偉大な農村芸能文化「新琴似農村歌舞伎」を再びよみがえらそうと、平成 5 年 7 月、新琴似連合町内会の役員を中心に伝承と保存活動を目的として「新琴似歌舞伎伝承会」を設立、平成 8 年 3 月地域の願望や北区の物心両面にわたる支援など多くのご協力をいただき、80 年振りの待望の復活公演は紆余曲折をたどりながら実現する運びになりました。

平成 28 年度には復活 20 周年記念式典や記念公演を開催することができ、ようやく 20 歳の成人式を迎え会員一同で喜びを分かち合ったところです。

この 20 年間、数々のイベントや慰問活動、テレビやラジオ番組へ出演、取材も受けてまいりました。特に平成 14 年度からは地元市立新琴似中学校のご協力ご理解を賜り、毎年 1 回、会員指導・演出による中学生対象の「歌舞伎講座」を開催しています。その内容は、①地域の開墾の歩みを知り、郷土に対する愛着心を育む。②地域の伝統芸

能の果たしてきた歴史的な役割を学び、伝承活動への興味関心を高める。③歌舞伎の実技や関連の指導に参加し、歌舞伎の醍醐味を味わい、その造詣を学ぶ。④日本古来の伝統文化・芸能へ関心を持たせる、などをねらいとした活動を実施するものです。学校・生徒や出演生の保護者からも好評を得ており、平成 30 年度で 13 回目を迎え 15 名の中学 2 年生が参加を希望しております。

中学生対象歌舞伎講座

また当伝承会では会員も僅少ではありますが増加の傾向をたどり、喜ばしい限りです。

平成 29 年度の当伝承会の公演では、歌舞伎に精通した一会員の注脚（脚本を一部脚色）による新しい演目「八笑人　両国橋番外　お化け尽くし」に取り組みました。芸者の幽霊とそれを何とか成仏させようと奮闘するお化けの掛け合いを現代風に脚色した喜劇作品を伝承会と新琴似天舞龍神の会員が共演し、ユーモアあふれる名セリフと名演技に会場は笑いと大喝采で大いに盛り上がりました。

八笑人　両国橋番外　お化け尽くし

平成 30 年度は、その続編ともいえる「八笑人　両国橋番外　お化けの嫁入り」を会員と大学生の共演により第 24 回新琴似文化振興会芸能部会主催「芸能のつどい」で披露しました。芸者の幽霊の娘をヒロインとし、その嫁入りに向けてお化けたちが様々な知恵を絞るという内容に、またまた観客の大反響を呼び起こすことができ、保存と伝承活動に専念している姿の一端をアピールすることができました。

今までの公演では必要な衣装・小道具・舞台背景などの制作等は、全て専門家に委託・借用をしておりましたが、これらの物語を作り上げるに当たっては、それら公演に必要な諸道具等は、会員の熱意と創意・試行を繰り返し整えました。会員の努力と絆の強さが如実に表れた飛躍的に変貌を遂げた作品となりました。

今、素人集団で発足した新琴似歌舞伎伝承会も成人式（20 年）を終え、人生に例えればこれからは成年期へと入ります。

振り返りますとこの 20 年間は、行政のご支援また多くの方々からご教導、温かいご助言、親身なご協力を仰ぎつつ、短いようで長く、喜びの中での苦しみ、苦しみの中での喜びを味わうなど繰り返した歳月でありましたが、何よりも会員一人一人が大切に伝承と保存の使命感を自覚し耐えしのぎ持続してきたことが伝承会の「姿」と「誇り」です。

今も難題は山積しております。が、いままでの貴重な体験を礎に新しい試みも取り入れ、解消をしてゆくうえにもこの「姿」と「誇り」を忘れることなく、更に会員一同心機一転、会の発展に努めてゆく所存です。

新琴似歌舞伎伝承会では新規会員を募集しています。年会費は4,000円です。詳しくは下記までお問い合わせください。

〇お問い合わせ
新琴似歌舞伎伝承会
TEL. 011-764-8804
（プラザ新琴似内）

あさぶ亜麻保存会

～亜麻から広がるまちづくり～

あさぶ亜麻保存会　事務局長　喜多（きた）　洋子（ようこ）

亜麻保存会ができて、今年で８年目になります。町内会の方や商店街の方たちと一緒に、麻生のまちの街路の植樹ますに観賞用の亜麻の花を植えたり、小学校などで、麻生の町名の由来となった亜麻工場の歴史などの授業を行っています。また、亜麻の糸を使った手芸講座を企画したり、イベントなどで、亜麻の実を練りこんだ亜麻そばの販売をしています。地域の企業の方から協賛金をいただいたり、町内会、地域の方から会費をいただいたりして、運営しています。

今年は、広報さっぽろ５月号に亜麻保存会の活動の様子が掲載されたことがきっかけで、小学生から何か手伝えることがないかと連絡がきて、あさぶ商店街駐車場付近での亜麻の種植えを手伝ってもらいました。広報さっぽろを読んで、自ら、主体的に関わりたい！と声を掛けてくれたことがうれしかったです。歴史だけでなく、まちづくりに関わってほしいという私たちの想いが伝わったんだなと思うと、とても感慨深い出来事でした。

また、亜麻の歴史の授業を受けた小学生から、亜麻新聞を作成して、北海道新聞の子ども新聞コンクールに出したいと連絡が来たりと、地域の子どもたちに亜麻のことが確かに伝わっていることが実感でき、とてもとてもうれしい１年でした。

亜麻の種

麻生の地域だけでなく、さまざまな地域から、種がほしいと連絡をいただきます。

薄紫色の可憐な花は、風にそよぎ、とてもきれいで、お花の良さを知っていただいて、育てたいと言ってくださる方にとても感謝しています。遠くは、愛媛県から問い合わせがあり、花だけでなく、繊維を取り出してみたいという方からの問い合わせも多くなってきています。

亜麻の実は、オメガ３脂肪酸が豊富で、亜麻仁油やサプリメントもあります。当別の無農薬の亜麻を使い亜麻公社などが販売しています。少し、お値段は高いですが、地産地消で顔の見える商品は、安心です。麻生では、商店街が亜麻の実が入った亜麻そば乾麺やスイーツを販売しています。スイーツは、藤女子大学のサークル“TFT-Fuji”がレシピを考案し、“菓子の樹”さんの協力を得て作っています。平成30年も、毎年参加している当別町の亜麻まつり（7月第２日曜日）や百合が原公園で開催されたイベントで、そばやスイーツの販売を行いました。

あさぶというまちの名前の由来

“あさぶ”というまちの名前は、明治23年に建設が始まり翌24年に操業を開始した亜麻の茎から繊維を採る工場（帝国製麻琴似亜麻工場）が麻生にあったことからきています。最後の工場長が、麻が生きるまち、「麻生（あさぶ）」というまちの

名前を提案し、これに賛同する人に署名を呼び掛けて、昭和 34 年に麻生町という地名が誕生しました。亜麻という植物は、実にも栄養があるし、お花もきれいですが、茎から丈夫な繊維が採れるのです。軍事産業とともに、全道に広がった亜麻工場。麻生にあった工場は、北海道で、2 番目にできた亜麻工場だそうです。

亜麻の記録冊子

平成 28 年から、北区の亜麻に関する歴史を記録伝承する冊子をつくろうと、準備が始まりました。北区地域振興課の支援を受け、あさぶ亜麻保存会のメンバー、さっぽろ青少年女性活動協会の方などで、亜麻記録冊子作成実行委員会（会長　宮崎正晴）を立ち上げ、定期的に会議を開催。子どもたちに歴史をつないでいきたいという想いで、小学校の授業で副読本として活用してもらえるものを作ろうと、作業を進めてきました。平成 31 年 3 月に完成し、近隣の小学校などに配布予定です。

札幌市の公文書館から、航空写真をいただき、当時の工場や倉庫、従業員の方が生活していた住まい、浸水槽などが鮮明に写る写真を発見し、当時の麻生の亜麻工場を知る方に、生活の様子をお聴きしました。航空写真とそのお話から、亜麻工場があった当時の周辺地図を札幌市立大学の学生がイラストに描いてくれました。

文章は、麻生に親交の深い元新聞記者の方が書き起こし、それを基に、和光小学校の先生にも会議に参加していただき、何度も文章を推敲（すいこう）し、完成させました。亜麻工場を知る方を新聞で募り、お話を伺うことで、当時の様子をリアルに感じることができ、取材に協力してくださった方に感謝しています。本当に、亜麻の歴史を残すという一つの使命を果たすために、たくさんの方の協力があったことに感謝の気持ちでいっぱいです。

まちづくり

私は実家が新琴似で、小中学校の友人が麻生に住んでいました。松の木がどうして道路の真ん中にあるんだろうと当時思っていたのですが、麻生のまちづくりに関わって、ようやくわかりました。亜麻工場の工場長の家の前にあったアカマツ。1 本だけですが、歴史を伝えるものとして残っていてくれてほんとによかったなと思います。残してくれた周辺の方々に感謝です。

歴史を知ることで、まちに愛着が生まれます。子どもたちや地域に歴史を伝え、亜麻の花を通して“あさぶのまち”をあたたかい支え合う地域にできたらいいなと思います。広報さっぽろを見て、連絡をくれた小学生のように、主体的に行動してまちをよくしたい！という方をもっと増やし、活動を広げていきたいです。

皆さんもあさぶ亜麻保存会でまちづくりしてみませんか？お花の手入れが得意な方、亜麻の花に関心がある方、あたたかいまちづくりに関心がある方などなど、一緒に楽しく活動したいと思う方の連絡をお待ちしています。また、活動はできないけれど、寄付をしたいという方も大歓迎です。寄付も“まちづくり参加”の一つなので、思いを受け止め活動していきたいです。

あさぶ亜麻保存会では会員を募集しています。年会費は個人が一口1000円、団体が一口2000円以上となっています。関心のある方は下記までお問い合わせください。

〇お問い合わせ
あさぶ亜麻保存会
TEL. 011-728-3700（café亜麻人内）

藍との出会い

篠路天然藍染協議会　代表　小笠原（おがさわら）　善孝（よしたか）

北区の藍の歴史

北区の藍の歴史は、明治 15 年、徳島県から、北の大地での大規模農業を夢見た一団が篠路村（現在の篠路や拓北・あいの里地区などを含む一帯）に移り住むところから始まります。その中心人物が滝本五郎でした。滝本は、篠路に移り住む前年に、北海道の農場開拓のため弟と「興産社」という会社を設立しました。

その当時の篠路は、木々や笹の根がうっそうと生い茂っている荒地でした。そこで、滝本たちは、まず、土地を開墾し、そこにソバや豆類、トウモロコシ、そして、故郷の特産物である藍を植えました。

滝本五郎

当時の冬は雪が多く寒さも厳しいものでした。また、夏の干ばつなど天候不順は作物の出来不出来に大きな影響を与えました。さらに、ヒグマの襲来やバッタの大発生など多くの困難に直面しました。

そのような中、滝本たちは、数々の困難を乗り越えて藍栽培に成功します。そして、明治 18 年には、藍の葉を加工して作る藍染めの染料である「すくも」の生産を開始し、翌 19 年には全国に販路を広げ、北海道において将来が期待される産業へと成長していきました。生産開始からわずか５年目の明治 23 年には「内国産業博覧会」に出品した「藍玉」（すくもを丸く固めたもの）が「一等有功賞」を受賞し、その品質の良さが全国的に認められました。

藍の移植作業の様子

しかし、ほどなくして、安価な外国産の藍の進出や、その後に続く化学染料の普及により、国内産の藍の販路は衰退の一途をたどります。そして、明治 32 年に滝本が生涯を終えてしばらく後、篠路一帯での藍栽培はその跡を絶ちました。

しかし、今でも興産社の名は「興産社町内会」として残っています。また、「あいの里」という地名や「英藍高校」の校名・校章にも藍が使用されているほか、愛好者による藍染活動を通じて地域文化として受け継がれています。

藍染め文化として復活した北区の藍

興産社の解散後、藍栽培が地域で見られることはなくなりましたが、昭和 59 年、北区民センターで藍染め講習会が開催され、その受講生が仲間と共に藍染めを始めたことが、サークル活動の先駆けとなり、藍染め文化として北区の藍は復活しました。

昭和 60 年 10 月には、藍染室が完備された篠路コミュニティセンターが開館し、ここが北区の藍の歴史を受け継いでいく中心的な場所となりました。篠路コミュニティセンターで開催された藍染め講習会を機に、藍染めに対する機運が高まりました。

平成 5 年から 10 年にかけては、受講者が多すぎて藍染室だけでは収まらず、篠路コミュニティセンター敷地内に廃車のバスを利用した工房を開設し、その中で講習会を開催しました。ここでの受講生は5年間で約 1500 名にも上ったと聞いております。

平成 6 年 8 月には、藍染めの地域への普及と発展を目的に「篠路天然藍染振興会」が結成されました。同会の会員数は多いときには 120 名以上にもなりましたが、平成 28 年 12 月に解散となりました。

一方、平成 23 年 4 月には、3 サークル会員 18 名で篠路コミュニティセンターを中心に活動する「篠路天然藍染協議会」が結成されました。同協議会は現在も活動しており、会員数は 17 名で私が代表を務めております。

藍染めとの出会い

一般的に藍染めを始めるきっかけとして多いのは、藍染作品に魅せられて染色技法を習得したい、作品を自分の手で作りたいといった理由が多いと思います。

私の周りでも、女性は子育てを終え充実した暮らしがしたい、男性は退職後を楽しく有意義な時を送りたい、との思いから始める方が多いです。

私が藍染めを始めたきっかけは、何か趣味として楽しめるものはないかと「広報さっぽろ」を見ていたときに「天然藍染入門 10 回講座」という講座に目が留まり、参加したのが始まりでした。当時は北区の藍栽培の歴史など全く知りませんでした。

この講座は、平成 15 年 6 月 16 日から 7 月 9 日まで開催されたもので、藍染液の製造から 5 つの基本的な染め方の技能までを習う内容でした。

そして、講座の終了後に仲間 8 人でサークルを立ち上げました。始めはハンカチやバンダナ、スカーフなどを染めることに没頭し楽しんでいましたが、縫製のできる人は染め上げた布をバッグやコートなどに加工したり、展示即売会に出品したりするなど、徐々に活動の幅を広げていきました。

そのうち、さらに高度な技法を教わりたいと思うようになりました。実際に藍染めをやってみると、色々な染め方を習得したいという想いが強くなり、先輩たちと議論になったこともありました。

今後に向けて

私たちの活動目標は、篠路天然藍染を広く知ってもらえるように、技法を駆使した藍染作品を見てもらうとともに、体験講座等を通じて、藍染めの楽しさや面白さを知ってもらうことです。

そのために、北区役所や篠路コミュニティセンターと連携し、藍染めに触れる機会を提供し、多くの方が気軽に参加できるような環境を整え、大々的な事業が展開できることを念願しております。

作品展の様子

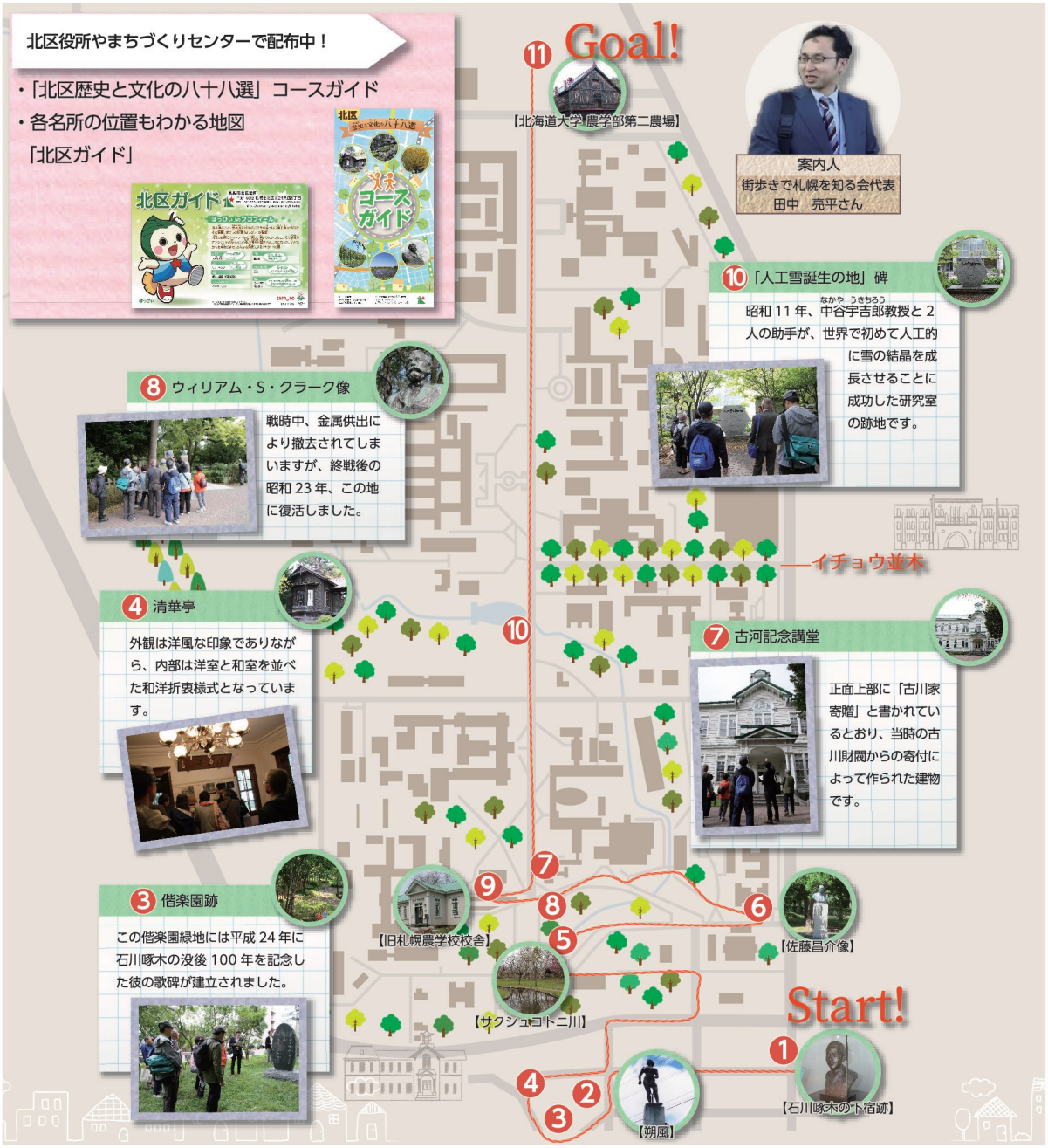
小学校での藍栽培の歴史や藍染体験の授業

○お問い合わせ
篠路天然藍染協議会　代表　小笠原　善孝
TEL. 011-771-5460

コラム⑤ 北区歴史と文化の八十八選

北区市民部地域振興課

北区では、区内に残されている歴史的な建物や文化遺産の中から 88 か所の名所を選び、案内板やガイドを作成してこれらを広く紹介する「北区歴史と文化の八十八選」事業を行っています。平成 30 年度には、5 つあるコースのうち「文学と学問の道(第 1 コース)」の一部を歴史に詳しい案内人とともに歩いて見学する「北区歴史と文化の八十八選を巡る会」を開催しました。ここでは、その様子を紹介します。「北区歴史と文化の八十八選」の詳細はコースガイドに掲載しています。地域についての学びや健康づくりに是非お役立てください。



【お問い合わせ】北区市民部地域振興課　TEL. 011-757-2407